

## 草原でひとときわ

夏の草原の中で見たもの  
しなやかに背を伸ばした野草ひとつ  
茎は風の流れを読んでる  
葉は光をすくい揺れてる

真昼の光 強く受けながらも  
吹き抜けてくる風を まともに受けて  
背を伸ばした野草ひとときわ

草原のただなかでひとり立つように  
折れず逆らわずしなやかに伸びて  
自分の軸だけを守っていた

柔らかさと強さの中で  
その茎は弧を描いて  
葉の縁 光をすくい  
揺れてる影さえ  
緑に染めてゆく

夏の草原の中で見たもの  
しなやかに背を伸ばした野草ひとつ  
茎は風の流れを読んでる  
葉は光をすくい揺れてる

乾いた大地の奥 のびたその根は  
確かな地面の鼓動を受け取っていた  
背を伸ばした野草ひとときわ

草原の中でただひとり立つだけ  
名もなく飾りもなく強く伸びて  
息づかいが聞こえてくる

折れそうで折れることなく  
細い糸のような強さ  
揺るぎなさ息づいてる  
大地の温もり  
そっと抱きしめてる

## 旅びとよ

思いつきでバスに乗って遠くの海  
ここにくると計画していたわけでもなく  
晴れた空に期待を込め思い立って  
今を忘れ癒し求め 気分を変える旅びとよ

旅びとなぜ旅をするのか  
答えは言葉にできない  
けれども一つ言えることは  
どこかに自分を探してる

はっきりさせることなく  
ゆっくりと答えを探したいのかも

陽の眩しさ白く光り青い海に  
遠く近く揺らぎながら散りばめられて  
日常の喧騒からすっかり離れ  
目の前広がる自然に 身を委ねる旅びとよ

旅びとなぜ旅をするのか  
誰もが曖昧としてる  
なぜならやりたいことに  
理由などあるはずないから

誰にも気兼ねすることもなく  
のんびり気ままに過ごしたいのかも

## 鹽竈の記憶

夕日が杉の木 斜めに染め  
石段の上 影を落としてる  
遠くなってゆく  
昼のざわめき

2010年の記憶の中  
幾度か訪れた神社のそば  
昔ながらの茶屋  
今もあるだろうか

震災前 鹽竈の夕方  
ただ静かに その日が終わってた

潮風の香りを身体中 ほんのりと感じて  
苔むした灯籠に“守られてる”気分思い出す

鳥居の赤は景色に溶けて  
長い歴史の深さを語る  
静かに夜の  
火を灯すように

2010年のあの夜は  
ちょうど行事が催されてた  
降りた町から  
光る石段

震災前 鹽竈の寿司屋  
熱いお茶を ゆっくり飲み干す

一日の疲れを身体中 心地よく感じて  
照らされた参道に“守られてる”気分思い出す

## HIとAI

La . . . . Lu . . . .

HIで夏の歌を書く  
何気ない画像 余韻求めて

今日はいつもと違う  
深掘りを求めてる  
これまでのこと忘れ  
違うものこさえて

裸足のままでポツンと立ってた  
あたたかい土の上に

自分の姿を思い  
なぞるように確かめながら  
ここにいる感触を  
自分の言葉で探す

ふた通りの プロセスにより  
同じテーマ 溶け合わせてゆく

HIは心に残っていた一枚の  
画像からつながる記憶の引き出し  
AIが示すアルゴリズムとどこかで  
ひとつの感覚で結ばれる

La . . . . Lu . . . .

HIは胸の奥に  
眠る古い思いを揺らす

今日はいつもよりも  
深掘りを求めて  
これまで気づいてない  
自分の心探して

セミの声が聞こえてくる  
一瞬のいのち燃やす儚さと

自分の人生と長さが  
違っているだけで  
同じ運命を  
たどってることを悟る

ふた通りの プロセスにより  
同じテーマ 溶け合わせてゆく

HIはいのちのそのものの温度で  
直感につながる言葉をつなぎ  
AIが示すアルゴリズムとどこかで  
ひとつの感覚で結ばれる

La . . . . Lu . . . .

AIで言葉与えて 夏のキーワード見つけてゆく中  
出てきた言葉をヒントに 感情に結びつけてゆく

今日はいつもの  
自分の好みの言葉を  
これまでのデータで  
思いがけない言葉で

白南風（しらはえ）のように形を持たぬまま世界をなぞり  
草いきれの向こう 人の気配をそっと読み取っている

誰かの気配  
背中に感じながらも  
あたかも自分の  
存在求めて

心に 残ってた  
つながる 記憶の  
AIが示すアルゴリズムとどこかで  
ひとつの感覚で結ばれる

AIは風鈴の音のように透明な理（ことわり）を響かせ  
どこからともなく魔法のように瞬間に言葉並べ

今日もいつもと  
同じように答えて  
これまでのデータに  
ニュアンス合わせて

静かな野山に響き渡る見えない大きさのセミ達が  
あたかも“ここにいる”という証をはっきりと示しながら

見えない気配  
背中に感じながらも  
言わずと知れた  
運命を悟る

心に 直感で  
つながる 言葉を  
AIが示すアルゴリズムとどこかで  
ひとつの感覚で結ばれる